

## 『危機』における「新しい関心」と「生活」

—ハーバーマスとフェルマンのフッサール批判を手掛かりに—

林 遼平  
(神戸大学)

### 序論

本論の目的は、フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以後『危機』と略す)において示した「新たな関心」を、「生活(Leben)」概念との関りから検討し、ハーバーマスとフェルマンによってなされたフッサール批判を退けることにある。フッサールの関心概念を批判的に論じた代表的人物として、ハーバーマスが挙げられる。ハーバーマスは『認識と関心』講演で、フッサールが提示した関心を論じ、フッサールの立場に対する批判的な見解を示した。彼のフッサール理解を簡潔にまとめれば以下のようなになる。すなわち、『危機』における「理論」あるいは「認識」と「実践」との一致は、ある特定の、限定された関心のもとでのみ可能である、という理解である。彼によれば、認識はすべて、ある特定の関心を可能性の条件としている。たとえばハーバーマスは、フッサールが後期思想に至って導きだした「認識と実践の一致」というテーゼは、「実体化された力」から、言い換えれば「イデオロギー」から——『危機』においては「客観主義」による意識から切り離された<世界自体>という想定から——解放された「解放的な認識関心(emanzipatorisches Erkenntnisinteresse)」(TWI p. 155, 邦訳 p. 159)<sup>1</sup>に基づいている、と主張している。そしてハーバーマスは、フッサール現象学がこの「解放的な関心」に導かれているこ

---

1. J. Habermas, *Technik und Wissenschaft als >Ideologie<*, Suhrkamp Verlag, 1973. (邦訳:ユルゲン・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』、長谷川宏 訳、紀伊國屋書店、1975年)。本論では、本著作 Suhrkamp 版からの引用を、TWI と略記し、その隣にアラビア数字でページ数を記した。また既訳を参照した場合には、既訳のページ数も併記した。なお「関心(Interesse)」は、本著作の長谷川訳において「利害」と訳されているが、論者[林]の判断で、本論においてはすべて「関心」という言葉に訳しなおした。

とをおおいかくしたために、「別の客観主義(anderer Objektivismus)」(TWI p. 153)に陥っているとして批判するのである。

こうしたハーバーマスの批判は、フェルマンによって「フッサールについての叙述が『奇妙に歪められたもの』」(GPD p. 223, 邦訳 p. 190)<sup>2</sup>として退けられている。フェルマンによれば、「別の客観主義」をハーバーマスが批判する論拠は、フッサールによる客観主義批判の論拠と同じである。そのため、皮肉にも、ハーバーマスがフッサールになした批判は、そのままハーバーマス自身にも向けられる。この議論に関する詳細は本論で検討するが、フェルマンは、ハーバーマスがフッサールの批判に失敗してしまうのは「統合的合理性(integrale Rationalität)」(GPD p. 35)の立場をハーバーマスがとっているからだと主張する。そしてフェルマンは、フッサールもまた「統合的合理性」という立場をとっていると述べる。「統合的合理性」は理論が実践を義務づけるか、あるいは実践が理論を正当化することによって、理論と実践の一致を主張する。フェルマンによれば、フッサールの場合には現象学的理論が実践を義務づけることによって、理論と実践の一致を達成する。フェルマンはこうした理論と実践の一致に危険性を見て、批判的理性という立場を取る。この立場は理論と実践を別の領域として明確に区別し、現象学的理論において得られた認識が実践を義務づけるという統合的合理性を退けている。

しかしながら、ハーバーマスとフェルマンの以上のような批判は、フッサールが提示した主張を正当に評価していない。というのも、第一に、ギリシャ哲学で創建された理論的関心とは別の関心を、フッサールが提示しようと試みているという点を、彼らは見逃している。第二に、ハーバーマスとフェルマンの論述は、フッサールの「生活」概念が持つ含蓄を正当に評価していない。そしてこれら二つの反論は、ハーバーマスとフェルマンが、以下の一点へ目を向けていないということにその根拠が存する。すなわち、彼らはフッサールが『危機』で述べた「新たな普遍的な関心の方向」(VI p. 147)<sup>3</sup>に目を向けていない。もともとフッサールは 1894 年に、「基礎論理学のための心理的研究」論文およびこの論文発表と同時期に書かれた草稿にお

2. F. Fellmann, *Gelebte Philosophie in Deutschland*, Verlag Karl Alber Freiburg/ München. 1983. (邦訳: フェルディナント・フェルマン『生きられる哲学 —生活世界の現象学と批判理論の思考形式』、堀栄造 訳、法政大学出版局、1997年)。本論では、本著作 Karl Alber Freiburg/ München 版からの引用を、GPD と略記し、その隣にアラビア数字でページ数を記した。また既訳を参照した場合には、既訳のページ数を併記した。

3. 以下フッサールの著作からの引用は原則として文内括弧内にフッサール全集の巻数(ローマ数字)とページ数(アラビア数字)を記す。また既訳(邦訳:E・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、細谷恒夫・木田元 訳、中央公論新社、2011年)を参照した箇所は、隣に邦訳の参照ページ数を記した。

いて、「関心」に関する言及を行っている<sup>4</sup>。しかしながら、吉川も述べるように<sup>5</sup>、フッサールは心理学主義批判という目的もあって、「関心」を『論理学研究』における現象学の問題設定から除外してしまう。再び「関心」が中心的に取り上げられるのは、意味の時間的発生を論じ始める1920年以降である。そしてフッサールは『危機』において、そうした発生的な議論をベースとしながら、「関心」を現象学において重要となる「態度(Einstellung)」と等置させながら論じることになる。とりわけ『危機』およびそれに関連した「ヨーロッパ的人間性の危機と哲学」講演(1935年5月)においては、「関心」が「生活」と結びつくことで、世界の存在を素朴に措定しながら生きる自然的生活が、「自然的関心」(VI p. 156)を持った「世界地平の内に没入して生きていること(Hincinleben)」(VI p. 146)とされ、こうした自然的関心とそれに対応する自然的生活に対して、世界と意識の相関関係を主題とする現象学的生活は、「新たな普遍的な関心の方向」(VI p. 147)をそなえているとされる。本論の目的は、こうした「新たな関心」の持つ意義を検討することで、そこで浮かびあがるフッサールの生活概念を背景としながら、フェルマンおよびハーバーマスのフッサール解釈を退けることにある。

第一章では、ハーバーマスのフッサール批判を確認する。ここでは、ハーバーマスがフッサールを「別の客観主義」という観点から批判している点が確認される。

第二章では、フェルマンのフッサール批判を確認する。フェルマンは、フッサールおよびハーバーマスを、どちらも「統合的合理性」という立場を取っているとして批判する。とりわけフェルマンは、フッサールが理論によって実践を義務づけ、両者を一致させるという点を批判している。

第三章では、まずフッサールが述べる「新たな関心」が、世界意識を主題にしていることを確認する。次に、この新たな関心において生きられる現象学的生活が、自然的生活を変化させてしまうとフッサールが主張していることを確認する。こうした確認を進めていく中で、本論はハーバーマスとフェルマンのフッサール批判を退ける。

---

4. このことに関しては、以下の著作参照。吉川孝『フッサールの倫理学—生き方の研究—』、知泉書館、2011年、pp. 30-36。

5. 同上、吉川孝、p. 34。

## 1. ハーバーマスのフッサール批判

### 1-1. 「別の客観主義」

ここでは、ハーバーマスの『認識と関心』講演におけるフッサール批判をまとめる。ハーバーマスによる批判の要は、フッサールを「別の客観主義」として位置づける点にある。したがって、本節では、この「別の客観主義」が何を意味しているのかを明確にすることで、ハーバーマスによるフッサール批判の意図を明確にする。

ハーバーマスは、フッサールが「純粹理論と生活実践(Lebenspraxis)との・・・連関」を主張している点を問題視している(TWI p. 148, 邦訳 p. 151)。また、両者の連関を主張する立場を、ハーバーマスは「別の客観主義」と呼ぶ。ところで、このような連関を主張することは、なぜ「別の客観主義」と呼ばれるのか。ハーバーマスによれば、フッサールが「別の客観主義」と呼ばれる理由は、純粹理論と生活実践の連関が、古代哲学における存在論的な前提に基づくことによつてのみ正当な形で主張されうるということを、フッサールが自覚していなかったことにある。ところで、ハーバーマスの理解によれば、古代哲学の存在論とは以下のようなものである。

「伝統的な意味での理論が生活のなかにはいつていったのは、宇宙の(kosmisch)秩序のうちに世界の観念的な連関を、つまり、人間世界の秩序の原型を発見したと信じていたからである。理論は宇宙論(Kosmologie)としてのみ行動をみちびく理論ともなることができたのだ」(TWI pp. 152-153, 邦訳 p. 156)。

つまり古代哲学において、我々が認識する宇宙の秩序は、そのまま、我々の生活秩序をも規制するのであり、その点で、理論と実践との一致は、<宇宙というものがいかなるものであるか>に関する存在論的な理解に基づいていたということになる。

そして、ハーバーマスは、フッサールの立場をこうした存在論を暗に仮定しているとして「別の客観主義」と呼んでいるのである。というのも、もしハーバーマスが述べるように「理論的な言明を素朴に事象と関係させる立場を客観主義的とよぶ」(TWI p. 155, p. 158)とするならば、フッサールは、伝統的な「純粹理論」を、つまり宇宙論を無自覚に前提して、理論が実践という事象に関係すると素朴に主張していることになるからである。こうした議論を展開したのち、ハーバーマスは、フッサールに関する批判を、以下のように結んでいる。

[フッサールが]客観主義の嫌疑をかけられるのは、[エポケーによって]生活形成要素が排除されたあとになつても、純粹理論という存在論的幻想が哲学的伝統

としてつねに学問に欺瞞的にまといつているからである (TWI p. 145, p. 158.  
[])内は論者(林)による補足)

## 1-2. 「解放的な認識関心」

ハーバーマスは、以上のようなフッサール批判を通して、関心と学問的認識との繋がりに言及している。関心と学問との繋がりを提示することで、彼はフッサールが述べる「無関心な傍観者」による現象学的な試みが、実際には「解放的な認識関心」を持った試みであることを主張し、フッサールを批判する。

学問的認識は、その特徴に合わせて、大きく分けて三つに大別されるが<sup>6</sup>、フッサール現象学はそのうちの「批判的に方向づけられた(kritisch orientiert)学問」(TWI p. 155)に位置づけられる。ハーバーマスによれば、この批判的に方向づけられた学問は「解放的な認識関心」に導かれている。ハーバーマスは、おそらくフッサールが「無関心な傍観者」として述べる立場を想定しながら、自然的な実践における「関心にとらわれない直観とはここではあきらかに解放を意味する」(TWI p. 153, 邦訳 p. 157)と主張する。詳しく言えば、「解放的な認識関心」は、あらゆる実体化された力やイデオロギーから、とりわけフッサールの場合には物理学などの客観主義が持つ関心から、解放されているのである。そして、この解放的な認識関心は「自己反省(Selbstreflexion)」において充実されるのである。自己反省において、「認識のための認識は成熟への関心と一致する」(TWI p. 164, 邦訳 p. 167)に到り、その点で「解放をめざす認識関心は反省そのものの完成を目標としている」(TWI p. 164, 邦訳 p. 167)とされる。ところで、ハーバーマスによれば、こうした自己反省において、フッサールは「自立し安定した宇宙(Kosmos)の統一」と、反省によって捉えられる自我の「不動の存在の同一性」を主張しつつも(TWI p. 154)、その切り離された宇宙の統一と自我とを、伝統的な存在論を素朴に前提することで結びつけようとする。そしてフッサールの現象学は、1-1 で検討した「別の客観主義」と呼ばれ、「解放的な認識関心」を備えているとハーバーマスは結論する。

ここからハーバーマスは、フッサールが古代哲学における「純粹理論」という発想に無自覚なのは、伝統的な理論概念を批判の俎上に載せることなく、自らが「解

6. ハーバーマスは、諸々の学問的立場を三つに区分し、その区分がそれぞれ対応した関心に依拠していると述べている。その三つは、「経験的分析的な学問」、「歴史的解釈学的な学問」、「批判的に方向づけられた学問」である。そして彼は、それぞれに固有の関心を提示し、どの学問もある関心において可能となると主張している。こうした主張には、フッサールの現象学を、普遍学としてではなく、あくまで多くのなかの学問のうちの一つとして位置付ける意図がおそらく背景にある。

放的な認識関心」に導かれていることをおおいかくしてしまったからだ」と主張する。ハーバーマスはこうした理解に基づいて、フッサールが想定した無関心な傍観者もまた、決して無関心ではなく「解放的な認識関心」に導かれているとしてフッサールを批判する<sup>7</sup>。ハーバーマスは、以下のように述べている。

認識の[客観主義がもつ]関心からの解放というこの契機に、フッサールは実践的有効性への期待をつないだ。あやまりはまさしくそこにある・・・理論が生活形成とむすびついたのは、理論によって認識が関心からきりはなされたためではなく、逆に、本来の関心[「解放的な認識関心」]がおおいかくされて疑似規範的な力が理論に生じたからであった。(TWI p. 152, 邦訳 p. 156. [ ]内は論者(林)の補足)

## 2. フェルマンのフッサール批判

以上のハーバーマスによるフッサール批判に加えて、ここではフェルマンのフッサール批判も検討しよう。まずハーバーマスと重なる点であるが、フェルマンも、フッサールが述べる「無関心な傍観者、世界の展望者」(VI p. 331)という現象学的態度への移行が、「別の客観主義」におちいつているという解釈に同意する。さらにフェルマンは、こうした現象学的態度が「美学的に向きを変えられた客観主義」(GPD p. 223, 邦訳 p. 189)であると言い換えフッサールを批判する。こうしたフェルマンによる批判は、「解放的な認識関心」に基づいているとして、ハーバーマスがフッサールになした批判と特に変わるところはない。

しかし、フェルマンはハーバーマスの批判的な主張から、さらにもう一歩すすめる。ここでなされるフェルマンによる批判は、ハーバーマスをもその批判的として包含する形で、拡張される。フェルマンによれば、ハーバーマスは理論を「実践に依存させる」ことによって、フッサールを批判している(cf., GPD p. 224)。すなわち、理論は、常に何らかの関心を伴った実践を元に成立しているのであり、その逆

---

7. このようにハーバーマスは、フッサールの現象学が「解放的な関心」に導かれていることに無自覚であったという点を「認識と関心」講演における論述の基軸に据えている。しかしフッサールがハーバーマスの述べる意味での「解放的な認識関心」を自覚していたか否かは別としても、決して自らの試みが持つ関心に無自覚であったわけではない。というのも、本論で後述するように、フッサールが述べる「無関心な傍観者」は、まったく関心を持たないということの意味するのではないからである。

ではないとハーバーマスは主張しているのである。そして、ハーバーマスは、現象学的な理論的自己反省が実践を規制するというフッサールの試みも、やはり「解放された認識関心」に依存して成立していると主張したのだった。しかしながら、フェルマンも述べるように、ハーバーマスのこうしたフッサール批判は、そのままハーバーマスにも向けられる批判となる。というのも、あらゆる学問が依拠する関心を検討し、その関心と理論とのつながりを取り出してくるハーバーマスの試みそのものが、フッサール現象学の持つ関心から自らが「解放されている」ということを前提としているからである。以上のような観点から、フェルマンはハーバーマスを以下のように批判する。

ハーバーマスが成功するのは、道具的理性によって統制された実践の濁りをもうずっと凌駕した没我的(ekstatisch)主観性の前提の下でのみである。したがって、ハーバーマスは、たとえ別の徴候の下にであれ、自分がフッサールを非難する理由になるものと同じ客観主義[別の客観主義]の手中に結局陥っているのである(GPD p. 190, 邦訳 p. 190、[ ]内は林による)

さらにフェルマンは、現象学が持つ問題点を、理論と実践の一致をフッサールが想定していた点に見ている。フェルマンの見解では、一方でフッサールは、理論が実践を「義務づけること」によって、理論と実践の一致を実現することを目論んだのに対して、他方でハーバーマスは、実践から理論を捉えなおすことで、実践のうちに理論を包括し、それによって理論と実践の一致を試みた。そして、フェルマンはどちらの立場も、自己の哲学的思索に「実践的要求」を突き付けるという点で「統合的合理性」という立場をとっていると主張する。すなわち、どちらの立場も、最終的に理論と実践とが一致することをなによりも要求しているということである。フェルマンはこうした「統合的合理性」にのっとった立場が「非合理主義の入り込む余地を作る」(GPD p. 37, 邦訳 p. 28)として危険視し、最終的に理論と実践を、別の領域として明確に区別することを主張する。以上のことから、フェルマンによるフッサール批判が依拠する見解は以下のようにまとめられるだろう。すなわち、理論と実践の一致を目指すことは、ちょうどフッサールがハーバーマスに「別の客観主義」として批判された際に示されたように、理論そのものを脅かすような要素——古代哲学の存在論や没我的主観性——を、理論のうちに持ち込んでしまう。こうした問題は、すべて「統合的合理性」という立場に由来している。したがって、理

論が実践を義務づける、あるいは実践が理論を基礎づけることは、それらが理論と実践の一致を目論む点で、「統合的理性」の立場として、拒否されなければならない。

### 3. ハーバーマスおよびフェルマンの批判を退ける

#### 3-1. ハーバーマスの批判に答えて——「新しい関心」——

ハーバーマスは、フッサールが「解放的な関心」をおおいかくして「別の客観主義」に陥っていると批判している。しかしながら、こうしたハーバーマスの主張は以下の点からして、退けられねばならない。すなわち、フッサールは決して現象学に固有の関心をおおいかくしてはおらず、むしろ「新しい普遍的な関心」というかたちで明確に自らの立場を述べているという点である。

フッサールが述べる「新たな関心」を、古代ギリシャとの関連で明確にするために、ここでは、フッサールが古代ギリシャ哲学に言及している箇所をまとめ、検討しよう。フッサールはウィーンでの講演「ヨーロッパ的人間性の危機と哲学」(1935年5月)において、ヨーロッパの歴史がもつ目的を明確にするために、ヨーロッパの人間が持つ関心と、それ以外の非ヨーロッパ圏の人々がそなえた関心を区別している。フッサールは「エジプト人やバビロニア人」(VI p. 325)といった、非ヨーロッパの人間が持つ関心と、ヨーロッパ人としてのギリシャ人が持つ関心とを、無限性と有限性という観点から区別している。また、ギリシャ人には、他の文化圏とは異なり、「理論(Theoria)」への動機がそなわっていた、と彼は主張している。一方で、非ヨーロッパ圏の人々は、いまだに「学問」を持たず、彼らの関心は「人間の目的と活動、その日常生活、個人的、集团的、国家的動機付け」等々によって、つねに「有限的に限られている周囲世界性(Umweltlichkeit)の中で動いている」(VI p. 324)。フッサールは、こうした個々の動機付けによって、有限的な周囲世界へと向けられている関心を、「職業的な生活関心(berufsartiges Lebensinteresse)」(VI p. 325)と呼んでいる。他方で、フッサールは、ヨーロッパ人、とりわけ古代ギリシャ人には、「無限性」と類似の性格を備えた「無限な課題、目標、検証、真理、『真なる価値』『真正な善いもの』『絶対的に』妥当する規範等々」(VI p. 325)といった事柄への関心が備わっていたと主張している。この無限性への関心という点で、ヨーロッパ的人間性は、他の有限的な周囲世界に生きる非ヨーロッパ圏の人々と区別される。フッサールが述べるには、「何にもまして、両方の側の『哲学者たち』の態度や彼らの普遍的関心の方向性(Interessenrichtung)が、まったく根本的に異なっている」(VI p. 325)のである。



このような無限性への関心のもとで、ギリシャ人は、理論へと動機づけられていった。フッサールが述べるには、周囲世界へと結びつけられた「自然的関心」が「世界のなかに埋没」しているのに対して、そうした理論は、埋没の背景として常に意識されている「普遍的な地平」としての世界を主題とする(Cf., VI p. 331)。ただし、フッサールが述べるには、こうした世界を主題化する関心は、宗教的一神話的(religiös-mythisch)な関心にも見られる傾向である。しかし、宗教的一神話的関心が常に「人間的諸目的をもった人間に役立つようにという目的」(VI p. 331)を持って世界を考察するのに対して、理論はそうした人間的目的をもった「実践的関心」に「関与しない傍観者」(VI p. 331)を要請するのである。この自然的—実践的な関心に関与しない傍観者が、純粋な理論的態度において、「世界考察と世界認識に関する情熱」を持つようになる、とフッサールは述べている(VI p. 331 Cf., VI p. 321)。

しかしながら、フッサールにとって、古代ギリシャにおいて成立したそうした世界考察への関心では十分でない。というのも、古代ギリシャ哲学においては、意識と対象の志向的な関係、言い換えれば「志向性」が、いまだに主題となっていないからである(Cf., VI p. 168, 邦訳 p. 301)。この意識と対象との志向的な関係は、相関関係とも言い換えられ、『危機』において重要な位置をしめている<sup>8</sup>。そしてこの志向性を問うために、フッサールは「世界自体と世界意識との絶対的に自立した相関関係」(VI p. 154)を問う「新たな普遍的関心の方向」(VI p. 147)<sup>9</sup>の必要性を説く。新たな普遍的関心とは、世界や諸対象を「主観的に現出してくる仕方や、その与えられかた」において問う、言い換えれば「その与えられかたのいかに(Wie)へと向かう、

8. 「反省をしてみると、ここに[事物『の』呈示様式がもつ主観的性格に]、はるかに広範で普遍的なアプリアリの構成要素であるところの本質的相関関係が存していることを知って驚く」(VI p. 162, 邦訳 p. 289) [ ]内は論者(林)の補足。

9. フッサールは、なぜこうした普遍的関心を「新たな」と形容するのだろうか。というのも、フッサールの発想を見る限りでは、こうした普遍的関心が『現象学の理念』や『イデーニI』に見られる「現象学的還元」と、ほとんど同様の事柄を指しているからである。ところで、『危機』第48節を確認すれば、この疑問に答えることができる。フッサールによれば「いまだかつて・・・世界(われわれがつねに語っている世界)とその主観的な与えられかたとの相関関係が、哲学的な驚きを惹き起こしたことはなかったのである。もっとも、この相関関係は、すでにソクラテス以前の哲学や、単に懐疑的な動機としてではあるが、ソフィストたちの哲学のうちにさえも、明瞭に現れていたのではあるが。この相関関係は、いまだかつて固有の哲学的関心を惹き起こしたことはなかつたくらいであるから、むしろ固有の学問の主題になったことなどない」(VI p. 168, 邦訳 pp. 300-301、傍点は論者[林]による)すなわち、フッサールは「新しさ」を哲学の歴史における新しさとして考えているのである。『危機』以前の著作等では、『第一哲学』講義を除き、歴史が中心となって論じられたものはほとんどない。ということは、フッサールは『危機』において現象学を歴史の文脈のなかに位置づけるなかで、現象学の関心を歴史において新しいと考えたと想定できる。したがってここで述べられている新しさは、『論研』以降つづいてきた現象学の思想文脈において、新しいというわけではない。

ある持続的な関心」(VI p. 147)を意味している。「この全体的な関心の向け換え(Interessenwendung)」(VI p. 147, VI p. 149)において、世界と、その世界に相関する「機能する普遍的な生」(VI p. 148)、いいかえれば「世界意識(Weltbewußtsein)」が主題化されるのである。

ところで、とりわけ『危機』においては、生活世界の中で営まれる様々な自然的な生活と、現象学的な生活が関心という観点において区別される。フッサールによれば、新たな普遍的関心は、世界内の諸対象に没入した「端的に—世界—のうちに—入り込んで生きる生(Schlicht-in-die-Welt-Hineinleben)」(VI p. 149)が持つ自然的関心と区別される。このことは、「エポケー」の議論が関心を介して生活と結び付けられていることを示唆している。フッサールによれば、現象学者や科学者も、あらかじめ与えられた(vorgegeben)生活世界という基盤(Boden)に依拠して自らの考察を行う。しかし物理学や心理学者および様々な日常的な「職業(Beruf)」を営む人々が、自然的な生活を生きる人間として「学以前の関心であれ学的関心であれ、また理論的関心であれ実践的関心であれ、それらの関心によって動かされながら、主題化されていない普遍的な地平において営まれる生活」(VI p. 148, 邦訳 p. 260)を送るのに対して、現象学者は「エポケーによって」そうした自然的な関心を「ともにするもの、共に遂行するものとしてはたらかない」(VI p. 139, 邦訳 p. 243)<sup>10</sup>。現象学者は新たな普遍的関心において世界と世界意識を主題化するという、自然的な生活とはまったく異なった関心をそなえた現象学的な生活を送ることになるのである。

以上の検討から、ハーバーマスがフッサールが「解放的な関心」をおおいかくすことによって、「別の客観主義」に至ったと述べている点について立ち止まって考えてみる必要があるだろう。というのも以上の検討に示されているように、フッサールは自らの現象学に固有の関心をおおいかくしているわけではないからである。もちろん、ここで述べられている関心はハーバーマスの主張する「解放的な関心」とまったく同じものではない。「解放的な関心」が実体化されたイデオロギーから反省によって解放されることを目的としているのに対して、現象学的な関心は意識と世界の相関関係の記述を目的としており、少なくともハーバーマスが述べるような「解放」を目的としているのではない。しかしながら、すくなくともフッサールが現象学のもつ本来の関心をくおおいかくしたという判断は、正当な評価ではないだろう<sup>11</sup>。

10. 同様の主張は『危機』36節の注釈および以下の箇所を参照。Cf., VI p. 155, V p. 159.

11. ところで、関心をそなえた自我は『デカルト的省察』において「無関心な傍観者(uninteressierter Zuschauer)」(I p.73)もしくは「関与しない傍観者(unbeteiligter Zuschauer)」(I p. 75)と名付けられている。ハーバーマスはおそらく「無関心」という言葉を読み取り、フッサール

### 3-2. フェルマンの批判に答えて——素朴性を取り去る生活としての現象学——

まず、フッサールに対するフェルマンの批判的観点を再度確認しておこう。フェルマンは、理論が実践を義務づけるという観点から、フッサールを批判している。たとえば、フェルマンは以下のように述べている。

主体を生活実践的な濁りから純化するいわばカタルシス機能は、理論に当然帰属すべきものである。そうしたカタルシス機能によって、主体は、純粹理性の基準において義務づけられた(verpflichtet)実践における態度を取る能力をより一層与えられるのだ(GPD p. 222, 邦訳 p. 189. 傍点は論者(林)による)

このようなフェルマンの主張には、以下のように反論することができる。フッサールは明らかに理論が実践を「義務づける」という主張をなしてない。むしろあらゆる理論は実践に由来すると彼は主張している。理論的な学問の代表としてあげられる物理学でさえも、その物理学があくまで物理学者によって生活世界のなかで営まれる実践であるかぎり、「彼らの『理論』はそうした実践の結果なのである」(VI p. 143)。つまりどのような理論も実践なしには生まれることがなく、したがって実践は理論を成立させるための必要条件である。こうしたことは、現象学の実践にも当てはまる。すなわち、理論的な学問としての現象学もまた、一人一人の実践においてなされることを必要としているのである。フッサールが述べているように、『危機』書の全体が意図していることは、現象学という「新たな課題と普遍的、必自然的な地盤とともに新たな哲学が実践的に可能であること」を「実際の行為を通じて」示すことにある(VI p. 17)。言い換えれば、現象学の実践の仕方を実際にフッサール自身がやってみせることにある。そして「ヨーロッパの理念」や「理性」——フェルマンの言葉で言えば「純粹理性の基準」——は、この実践の遂行においてはじめて獲得されるものであり、決して現象学的考察の当初から実践を義務づけるために与えられているのではない。したがって、フェルマンのフッサール批判は『危機』の内容を正当に評価したものであるとは言えない。

しかしながら、このような反論を示した場合、以下のような批判が想定される。すなわち、フッサールはあらゆる理論を実践に結び付けることで、フェルマンの述

---

が本来の関心をおおいかくしたと判断したにちがいない。しかしながら、注意しなければならないのは、フッサールも述べているように、この無関心な傍観者は関心をもたないということの意味しない。むしろこの傍観者は、意識の持つ志向的關係を、「見て取り、十全に記述する」(I p. 73)という積極的な関心を持っているのである。

べる「統合的合理性」の立場をとってしまっているのではないか、という批判である。この批判に対しては、以下のように答えることができる。すなわち、フッサールは理論が実践を必要条件としていることを想定しているが、実践が理論を包括するとは考えていない。とりわけ現象学的生活においてなされる実践は自然的な生活における理論に、重要だが、ささいな「変化」をもたらすにすぎない。すなわち現象学的な生活は、自然的な生活の「素朴性」を取り払い、世界の意味を変えてしまうだけである<sup>12</sup>。フッサールはこの点について以下のように述べている。

超越論的-現象学的態度によって素朴性が打ち破られるとともに、ある重大な変化が・・・起こる。たしかに現象学者としてのわたしも、つねに自然的態度にもどることはできるし、わたしの理論的な関心やそれ以外の生活関心の素朴な遂行に立ち帰ることはできる。わたしは、それ以外の場合と同様に・・・わたしの世界のなかの人間としてもまた活動することができる。いま、それ以外のばあいと同様に一といったが、しかしやはりそれ以外のばあいとまったく同様にはではない。というのも、わたしはもはや古い素朴性をとりもどすことはできないのであり、それを理解することができるだけであるからである。(VI p. 214, 邦訳 p. 378, 傍点は論者[林]による)

素朴性を取り払うということについて、フッサールは1931年になされた「現象学と人間学」講演においても言及している。以下に引用するように、フッサールはエポケーを、自然的な生活における「素朴性」を徹底的に取り除くために用いていたことが分かる。

そこにおいて意味と認識における役割を、エポケーが私たちに対して獲得する意味連関への諸省察を忘れてはならない。世界放棄(Weltentsagung)や「世界を括弧に入れる」といったことは、これからさき世界一般がまったく主題とならないということの意味しているのではなく、むしろ世界がいまや、新しく全面的により深い仕方で、私たちの主題にならなければならないことを意味しているのである。私たちは素朴性において、一般的な経験から、世界を存在するものや、そのつどの様態で存在するものとして、私たちにすでに与えられたものと

12. H. ヤコブスも、主にフッサール全集所収『現象学的還元について』(XXXIV)の草稿を検討することによって、現象学的な反省が、非反省的な生活を変えてしまう(render)と主張している。Cf., Hanne Jacobs, *Phenomenology as a way of life? Husserl on phenomenological reflection and self-transformation*, *Count Philos Rev*, 2013, pp. 349-369.

しているが、私たちは単にそうした素朴性を拒絶してきたのだった(XXVII, p. 173)

ではこの場合の〈素朴性を拒絶する〉とは、具体的に何を意味するのか。フッサールによれば、現象学的生活は、意識を主題化することによって、世界をつねにコギタートゥムとして、言いかえれば主観的なコギトとの関係において捉えることになる。それによって、世界の意味が変化する。この変化をフッサールは〈素朴性を拒絶する〉という言葉で意味しているのである。『危機』においてフッサールは以下のように述べている。

現象学者は、まさにこの終点であるということ、すなわち世界生活における目標にのめりこんで生きるということ、そしてその目標に限局されているということ、そのうちにはたらいっている主観的なものを顧慮しつつ固有の主題とするのだが、そのことによって世界一般の素朴な存在意味が、彼にとっては「超越論的主観性を極とする体系」という意味へと転化する(verwandeln)(VI p. 180, 邦訳 p. 323)

ただ世界は、判断中止が首尾一貫して遂行されているあいだは、単にその存在意味を与える主観性——その主観性が妥当させることによってこそ、世界は一般に『存在する』のであるが——の相関者として、眼にとめられることになるのである(VI p. 155. 邦訳 p. 274)

意識との相関関係において世界の意味が「転化」するのならば、意識に関する分析が詳細になればなるほど、それほど世界の意味も変わってくることになる。『危機』では述べられていないが、世界は現象学的な考察によって「理念」として捉えなおされることになる。「事物野」における「外部地平」は、世界の持つ空間—時間的形式において、外部地平の極としての世界を指示する。つまり、意識が不一致を総合していく無限の過程において、その過程の到着点にある世界が指示されることになるのである。フッサールが述べるように、可能的な経験として示された潜在性は、いま知覚している顕在的な側面から、さらに広い可能性を指示し、その時「ただ世界の『形式』だけが、まさしく『世界』として、その下図を描かれているにすぎない、といったようになるのである」(III, p. 49)。そして、そうした「下図を描かれた」世界の完全な所与性は——もとよりそれは不可能であるからこそ——理念として捉

えられることになる(III, p. 287)。こうして、世界は実在的な諸事物とは区別され、経験の理念という意味を新たに与えられるのである。

こうした「理念」としての世界は、たとえ現象学的生活から自然的生活に戻っても、再び諸々の事物のように捉えられることはない。すでに述べたように、「私たちはもはや古い素朴性をとりもどすことはできない」(VI p. 214)のである。こうして、現象学的な新しい関心は、その関心が生きられる(*gelebt*)ことによって、自然的生活の素朴性をとりさるといふ変化をもたらすのである。

## 結論

以上の検討から、本論はハーバーマスとフェルマンによるフッサール批判を退けることを試みた。本論ではとりわけ「新たな関心」という概念に着目した。そして、新たな関心において生きられた現象学的生活が、そのまま自然的態度において生きられる生活を「変化させる」という主張を、本論は結論した。この結論を導く過程で、ハーバーマスとフェルマンの述べる「別の客観主義」および「統合的合理性」という、フッサールへの批判的な観点を退けることとなった。これまで見てきたように、フッサールは理論（現象学）によって実践（自然的態度における生活）を＜義務づける＞とは考えていない。また理論と実践が一致することも、フッサールは主張していない。むしろ現象学の実践は自然的生活を変化させる。つまり自然的な生活で営まれる様々な理論と実践——物理学者や心理学者、日常的な生活を送る人々などの活動——がもつ素朴性を現象学的生活は取り去るのだ。

ここで、フッサールの述べる実践がハーバーマスやフェルマンの述べるそれとは別の次元にあることが理解できるだろう。すなわち、現象学の実践は自然的な態度で行われる実践とは明らかに異なる。そこでフッサールの実践概念は一般的に議論される実践とは異なったものであると言えるが、このことについては本論では論じることができないため、別の機会に譲りたい<sup>※</sup>。

---

※ なお本発表は、2016年3月に開かれた「フッサール研究会」における発表内容を改訂・作成したものである。発表の際に諸氏から有益なご意見を頂いた。とりわけ、岡山大学:植村玄輝氏からは、本発表時に本論文で参照した文献:吉川、2011年。H. ヤコブス、2013年をご教示いただき、また別の研究会においてもコメントを頂いた。また、論文アドバイザーの東京大学:榎原哲哉教授からは、論文に関する貴重なコメントを頂いた。発表時にご意見を下さった方々、植村氏、榎原教授には、ここに記して、感謝を申し上げたい。